

幼児の描画表現における“想像と創造”

平田 智久
(十文字学園女子短期大学)

1. はじめに

幼児にとって描画活動は大好きな活動のひとつである。その描画表現は、自らの感性を働かせて、自らの獲得した能力を駆使して表わす活動であることは言うまでもない。表現活動を通して、より豊かな創造性を培う…ということも人間らしく育っていく上で重要なことである。

教育要領・保育指針でも示されているように「イメージ豊かに…」「創造性豊かに…」と、重要視されている現在だが、子ども達の行動のどこをさして、イメージの表れとしてとらえているのかは、個々の指導者によって異なることを多く感じるのは私だけだろうか。

そこで、改めて子ども達の描画表現を検証し、イメージ(想像)を子どもが獲得し表わす姿を模索すると共に、イメージの拡がり新たな行動を起す源になっているのだろうか…そうした行為の積み重ねとして、創造性を高めているのだろうか…という実態について、つまり、想像(イメージ)と創造の相関について明らかにしたいと考えた。

2. 目的

子どもの表現行動を受けとめ、認め励ますことによって、子ども達の感性を高め、創造性を豊かにすることは明らかなことであるが、その受けとめ手としての指導者、もしくは子ども達を取りまく大人達が、子ども達の描画表現の中から子どものイメージをとらえる視点を明らかにすることで、子ども達のすこやかな感性の育ちと、豊かな創造力を培うことになる考える。

3. 研究方法

子ども達の描画活動に直接触れる中で、子どもの自発的な(大人からの指示やアイデアが提供されない状況下での)描画活動例(=作品)の中から、以下のようにイメージと活動の関わりについての型を予測して分類して検証することにした。

イメージをもっているか否か、イメージをどのように獲得していくか…という視点で型を考えた。

A型. イメージを(想像)持たず、描画的な行為(線をひく、ぬる、感触を味わう、こするなど)を繰り返している。

B型. 素材(描画材料)に触れて遊ぶうちにイメージを獲得し、表わした。

C型. 絵に描きたくなる、描く時すでにイメージがある場合。

4. 結果

・A型について

イメージ(想像)を持っていたか、いるのか…について、本人以外の者が知る方法は、本人が言葉で意味づけをするか、見るからに描いた根拠が具体的な形になっている時に、初めて確認できることである。従って、錯画期・乱画期と呼ばれている時期の作品のほとんどは、「イメージを持っていない」ということになる。

また、象徴期・意味づけ期といわれる時にでも、イメージを持っていない…と思われる活動は多くみられ、5歳ごろの子どもでも、ただ単に「気持ちいい」と、えのぐをぬりたくることもしばしばある。

・B型について

ものに触れて遊ぶうちに、イメージを獲得していく姿は、描画活動に限らず、様々な子どもの行動の中で読みとれる。砂に触れたり、新聞紙で遊んだり、遊具に登っただけでもイメージを働かせはじめる。

その姿は日常的にかなり多く、本論の描画活動にしばって観察しても同様である。その多くは「視覚的刺激」に誘発され、イメージ化している。

参考作品1は、たまたま紙にえのぐがこぼれ、あわてて紙を持ち上げた時にできた根拠を見て、「これ、道路みたい…」と喜び、何枚もえのぐをころがして「道路づくりを展開した。その後、乾いた一枚にサインペンで加筆した、5歳男児の例である。

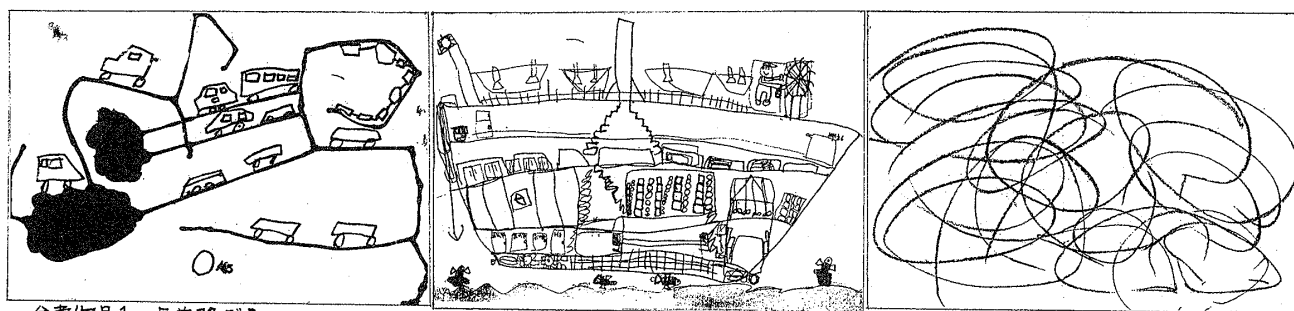
・C型について

参考作品2は、6歳男児が描いた「船に乗ったよ」という絵である。夏休みに乗ったフェリー・ボートの印象が強かったことが絵を描かせたのだろう。

具体的に描けるようになった子ども達の多くは、描く以前に心を動かしている対象がある。つまり、具体的なイメージをもち、描き始めている。

いわゆる概念的といわれている「お人形さん」や「お花」にしても、美しいものへのあこがれの具現化だとすれば、それはイメージをもって形を描き、色を組みあわせて表わそうとしていることになる。

身近にいる大人が「概念画だ!」などと決めつけず子どもの心情を読みとる心のゆとりが必要になる。



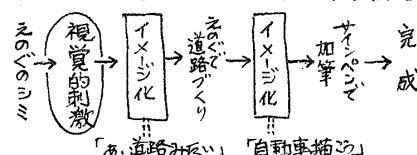
参考作品1.「道路だよ」

参考作品2.「船に乗ったよ」

参考作品3.「ジェットマン」

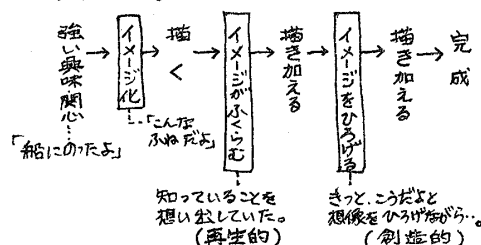
5. 考察

前出の参考作品1は、偶然出会ったえのぐのシミに触発され、さらにえのぐで道路を描くうちに自動車を描きたくなる…というのは、イメージ（想像）の積み重ねであり、新たな表現の獲得でもある。この点が創造的な行為といえる視点ではないだろうか。その積み重なっていく心情を図式化すると、次のようになる。



また、参考作品2について、描いている様子は、およそ次の通りであった。

「船に乗ったんだ」と、会うとすぐに話してくれた。たくさん部屋のあったこと、船長室（操舵室）を見たことなど、具体的な事象を思い出して描いた。その後さらに、実際に見なかったスクリューや機械について空想しながら描き加えていった。イメージが積み重なりながら新しいイメージが生れていく様子がよくわかる。その姿は参考作品1同様、創造的と言えるが、この事例からは、見たものをその通りに描こうと再生的であったが、徐々にイメージがひろがり、創造的想像活動になっていく様子がわかる。図式化すると、次のようになる。



以上2例を掲げて考察したが、他にも多数類例はある。その子どもたちの描く過程の中で、様々に変容していくイメージを適切に受けとめることが、子どもの次の行動を誘発していくことになる。結果だけで共感しようとする大人の態度は、イメージを豊かに育てる

ことができないと考える。この考察の上に立って、さらにA型の作品群について再度検証してみると、確かに気持ち良く手や腕を動かした根拠としての作品が多い。

しかし、参考作品3で示したような Scribble だが描いた3歳男児が「ジェットマン」と名づけている。

これは Scribble を味わいながらイメージを浮かべたことにほかならない。

いわゆる象徴期・意味づけ期と言われている学説や研究事例では、円の獲得とことばの獲得によって意味づけが始まる…というのが定説になっている。しかし参考作品3のように Scribble 期に、イメージを浮かべている例はかなりある。そのようなイメージを受けとめることができない時も多く、単なるなぐり描きとして判断してしまいかねない。いかに子ども達との人間関係が親密であることの重要性を物語っているか、推察できる。気持ち良く Scribble しながら「ジェットマン」と言葉に置き換えて、伝えてくれる人間関係のことである。

さらに調べてみると、言葉に置き換えられない時期の錯画の中に、線のぬたくりではあるが、こだわって手を動かした（子どもの意志が感じられる）錯画にであった。

6. 結び

想像（イメージ）をもつことと創造性の相関について、改めて重要な関わりであることは理解できた。しかし、どのように関わりあうかについて、今後研究を進めなければならない。

また、従前の描画発達理論に、子どもをはめ込むのではなく、ひとりひとりの表現として造形行動を見直さなくてはならないことを痛感した。それは錯画期における表現の実態についての研究であり、言葉にならない表現、つまり造形的表現・造形行動の中から心情を受けとめる重要性を感じ、改めて先達の諸学説を学びなおし、現実の子ども達の姿から学びとりたいと考えている。